

録上再誌

ふるさとの証言

大阪釜ヶ崎昭和36年

井上青龍 郡昇作 松原忍

NHK 教育
テレビ
1981-8-8
再放送を録音

—— 今から二十年前の昭和三六年八月一日、大阪の釜ヶ崎と呼ばれていた域で、大規模な暴動がもちあがった。きっかけは日雇労働者の交通事故で、処理にあたった警官の不手際に対し、怒った人々が交番に投石、事件は思ひがけなれどひろがりをもてた。集った群衆は五千人をこえ、警察は急遽近隣府県に機動隊の応援を求めた。こうして三晩にわたった釜ヶ崎騒動は、それまでみすごされてきた大都市のスラム問題に、初めて大きな関心を呼びおこすことになった。

アナウンサー 当時ですね、ああいう騒動がおこると、いう予感がありましたか。

井上青龍

え、それは充分感じましたね。

だから、あの事件は、日雇労働者も人間である、うん、いわゆるケタオチアンコと呼ばれるわけですよ。ケタオチということは、人間の一つのレベルから落後したという、普通の人間のレベルから下であるという、マ、そういう言い方、それがケタオチという表現

なんだから、ケタオチアンコも人間であるという、いわゆるシャバに向かつての、マ、人間復活の宣言であった、と今でも確信してゐるんですけどね。うん。

—— 釜ヶ崎、ドヤ街と呼ばれるような地域ができ始めたのは明治の中頃である。のちに町名改正で釜ヶ崎の公的な名称は消えたが、その呼び名は残った。

職を失ない、家族を捨て、生活困窮のはてにこの町に移り住んだ人も多い。

その日の食事とヤド代のため職を求める人々に仕事を選ぶ余裕はない。もちこまれる仕事の多くは、一般に敬遠されがちな日雇の港漕荷役や建設現場の雑役などである。それは景気のよしあしに極端に左右される仕事でもあった。

アナウンサー 井上さんは釜ヶ崎に実際におすまいになつてらしたわけですよ。

井上青龍 ええ、そうです。

アナランサー それは、なぜですか。

井上青龍 ようするに、ぼくは、この写真の仕事についているのは、写真のジャンルの中で、社会派というが、ドキメンタリー、しかもそれは、こり、いわゆる単純な報道写真のやなしに、人間の本质を追求するのが眼目である。マア、ドキメンタリーですけれどもね。

マ、釜ヶ崎はオアシスであるというね、そういふ考え方もできると思ひますよ。マ、確かに、裸の町、人間裸になって、本当に人間の本质をさらけだして生きていけるということ、これは、理想的なことかもしれないんですよ。

そうはいいいながら釜ヶ崎に住んでる人というものは、マ、いわゆるシャバから落後したというが、シャバの人間からはどう見られてるわけですかね。

マ、それだけよけいにこの裸の町における人間の条件というが、人間の生きざまというが、本当に泣きたくなるほど好きになり、死にたくなるほど嫌いになる人間、マ、それはその際たるものが僕というが、自分なんですけど、ね、自分の中のいやなもんなんだけど、

アナランサー 写真をとるといいますともね、当時の釜ヶ崎でどう簡単にシャッターを押してたんですか。

—— 当時、釜ヶ崎で仕事の経験にあたっていたのが手配師たちであった。毎朝、たのまれた人数の労働者をこの街で集めては仕事先に送り込む。多くは暴力団関係者だったために、ピンハネや契約違反などさまざまな問題を引き起こしていた。

郡昇作 我々働いているもんは人間と思つてへんのか、というふうな考え方がですね、いさおいね、そういう、この仕事の不安がですね、自分らの権力者、警察なり、その使用主、中小企業の使用主ですね、あるいはど水が使つてる手配師、そういうもんに対するラッパンがですね、もう常日頃あるわけなんです。だから、ああいう暑い日にですね、暴動に発展したと、このことは、日雇労働者です。ね、日頃のラッパンだと、それにつきますというていりいんぐどないかと思ひますかね。

アナランサー 二六年の八月一日に、松原さんはどこにおいでになったんですか。

松原忍 西成警察署におりましたです。

なんとも壮絶そのものだったですね、そりやもうたくさんさんの労働、郡集の中の方血を流してますからね、もう血を流してダラダラして、マ、検査されて引っぱってこられますわね。私はたまたまそのときには警察の中に

井上青龍 ええ、とてもとても、ええ、まだ

からドヤに住み込みまてね、というのには僕はおんまり器用な方ぢやないんで、常に身体をその中に入れ、持ち込んで、なにかをこなして仕事ができないうけ、そりいりふき、ちよな男なんで、だからドヤを借りまてね、ええ、

で、おやその日から写真がこれかというところぢやない、やはり一緒に酒を飲み、あ

るいはケンカをし、マ、そういう中で、かといつて、カメラを持、あのはだかで見せる、カメラをかまえて写真をとる、それはできないですよ、いわゆる盗みどりというが、それ違ひで、まに、居合ひ抜きのように写真をとることもあった。

それでもたまにどのカメラを見ずかされちゃって、うくん、そこでトラアルがおこるんですよ、その当時ぢいぶん、あの、カメラマンは、写真家入り込んでいましたね、多くの人が、しかし、トラアルがおこるたびに、もうそれでしっぱをまいて、うくん、にげちやうっていうか、

しかし、ぼくはしつ二い方ですからね、ぼくはカメラ二台もつてまてね、一台はこり、ケンカ用のね、ボロカメラですよ、だから、殴りあひのケンカをする、マ、そこで仲良くなつて、酒を飲んで、マ、そりいう、こ

う一つの自分の場のひろげ方というか、それをやりまていったわけですよ。おつて、受け入れ体制でね、検査したなにを調べたりしてありまてたけど、まるでね、もう暴力行使に入つてからというもの、軍の戒厳令のような、そりいう状態だったですよ。

アナランサー 井上さんは事件の当夜ですね、釜ヶ崎にいらつたわけですか。

井上青龍 いや、それか残念なからいなかたですよ、うくん、それも、また週刊誌の仕事で山陰にいたんですよ、で、なんか仕事から帰つてくると、やどやに電話がポソと入りまて、ニュースを見る、で、ニュースで知ったんですよ、それで、その仕事をほったらかしにして、車に、車でふつとぼして、明け方に着いたんですよ。

アナランサー 帰つてすぐですか、その騒動のどちら側に井上さんはいらつたわけですか。

井上青龍 いや、それは聞くまでもない、僕は労働者側ですよ、だって僕はいつも労働者と一緒に生活をしてるというか、僕自身も労働者だと思つてたんですよ、それから、そこで生活するといふことは、そうはいいながら、やはりカメラを持ってる以上は、どこかで見るというか、そりいう眼があるわけだから、それで例の、このヤンカソカメラでね、タ

オルがけて、それは当然、僕は労働者の側からとるわけ、マ、それでNHKさんはじめテレビ、新聞は、ウン、機動隊と一緒に、さしおかけです。

で、ぼくはこっちで、右手でカメラがまえて左手で石を投げながら、マ、11月でしよう、なげながら、マとったというか、マ、そのころ、例の今の機動隊のジェラルミンの盾がはいんです。鬼退、なんか木の板の板切れの盾をね、作ったんです。そういう盾で、それはヘルメットがぶつた制服の警官だった。で、それでやはり私服がね、ずいぶん労働者の中にも入り込んでいた、で、その私服の中でもすごい精鋭の、うん、機動隊何十人か、あの一帯、釜ヶ崎銀座を横一列、横隊に並びましてね、手銃をガッチャガッチャとならしながら我々の方にくるんですよ、ね、もう、そのときは本当に恐ろしかったです。

アナウンサー 事件のあと手配師しゅんをこめだすために大阪府が労働部の面成分室という、マア、職業斡旋所ですね、郡さんはその責任者でいらった。これはどういう機関なんですか。

郡昇作 釜ヶ崎へ来た人がですね、けさ梅田へ着いたと、そういつ人が釜ヶ崎へ来て、仕事を求めたときに、すぐにでも紹介できるよ

ね、どうもできんので、寺院の子供たち、いわゆる大人ですけれども、子鬼を分室にさしておけるからよろしくたのあと、こういうふうにきりてきたんです。

で、みんなにですね、すまんけれども、みんないきりたて怒りのせりばかないから、坊さんの服を着たままで、あの、紹介に当分来てくれと、それから、寺院さんのあなたのおとうさんたちにも、あの、八月一日には僧侶の服装をして、この分室の前に一列に並んで、みんなの気持ちをやわらげるように協力してくれと、こういうふうに関心で、八月三十一日の晩はそこで寝たわけなんです。

私かケがしたり命とられるのはおええんけれど、職員の方さんに頼んだお寺の息子さんたちにかかあつては困ると心配したんですけど、ね、寝るとですね、私達の周囲もですね、警官がずっととりまいて寝るんです。それで分室の外側をまた三百人ほどの警官が徹夜で、不眠不休、ほんまにとりまいて寝るんです。

アナウンサー あの時間、事件をきっかけにしてですね、警察その他の対応はずいぶんかわったんだそうですね。

松原忠 そう、かわりましたですね、マ、府も市もそれだけのね、福祉対策に力を入れましたが、警察としましてはですね、まずあ

うな紹介をやったわけですね。

アナウンサー 色々、いわゆるあの、労働部の職業安定業務と違うわけですね。

郡昇作 ええ、全然違うんですね、登録はないで、自由に労働者が自分の好きな仕事を探して行けるといふふうな方法をとった。

アナウンサー 郡さん、マ、責任者にきまりました、ただ、あの、職員の方はですね、相当きつい業務ですから、なかなか集らなかつたそうですね。

郡昇作 いや、きびしい言い方より、おそろしく言うて、みな、ふるえあがってるときです、からね、で、部長さんも心配してね、ええ、これ、これ、これ、知り合ひから行って頼んでみて、で、給料をですね、当時としては月給普通の人の三倍ですから行ってこれと、こういふふうな話でいったら、みんなこりや大切な仕事だけれども、私にはちょっとおきませんと、みなことわられました。

それでももう九月一日までには間がない、で、二ころやすところお寺さんに行きましてね、お知り合ひのお寺も含めて、寺院の檀家からね、勇気のある人を紹介してくれんかと、こう頼んでいったんです。そうすると、一週間たつても返事がこない、八月三十日になつて

の、住民の警察に対する反感、反発感ものすごかったですね、それをなんとかやわらげなければいけないうことから、ええ、防犯相談コーナーというのを作ったんですよ、そして、婦人警官と男子警官とアベックでね、アベックパトロールをして、いろんなその住民の苦情、どういふものを聞いてですね、処理して、あるいは除々に警察の方に少し理解が、これだけゆるんだらいいと始めたわけですが、最初ね、どういふことをやっていいかわからないんですね、マア、あの、たまたまそこら、一番あの地域の中心に件こんでいくには、子供から入っていったのいいんやないかと、あの地域には不就学児童が相当多かったからね、マア、そういふところのアパートとか旅館、訪ねていきましたらね、ポリ公なにくにきた、と、知ってるんですね、自分らが警官であるというのを、ポリ公なにくにきた、帰れ、帰れと、もう相手にしてくれないんですね、そういう点で、相当悩みましたかね。

アナウンサー でも、なおかつ釜ヶ崎の中へ飛び込んでいけたわけでしょう、それはななんだたんですね。

松原忠 それはやはり、私、なんといいますか、あの地域の、そのいろんな事情で釜ヶ崎へ流れてきてますけども、個人個人に接して